

フォーラム

特定非営利活動法人 奈良 21 世紀フォーラム会報

2020年
新春号
No.36

ニュース

◇ 2019 年実施の主な事業

- 1 月 1 2 日 正暦寺清酒祭り見学会を開催
- 4 月 1 日 神話と史実で織り上げたロマンの道
—山の辺の道沿いの旧跡を訪ねる—
- 5 月 1 8 日 「奈良企業人列伝 奈良に息づく風土産業」を出版
- 6 月 1 5 日 令和元年度通常総会開催
- 6 月 1 8 日 行基の足跡をたどる
《以上 会報 No. 35 で報告》

- 9 月 2 6 日 寺内町今井を中心に、江戸期の建物探訪
- 1 0 月 2 0 日 春日大社奉納蹴鞠の実施
- 1 1 月 9 日 第 10 回大仏書道大会
～ 1 0 日
- 1 1 月 2 0 日 宇陀松山 城と町



年頭のご挨拶

令和2年の新春を迎え、謹んでお慶びを申し上げます。

本年が会員皆様にとりまして輝かしい年になりますよう、心からお祈り申し上げます。

当フォーラムは、2000年（平成12年）4月に新しい世紀での飛躍を願い古都奈良の文化資源を活かし地域文化の振興と活性化に寄与することを目的に設立されました。

おかげさまで、本年4月に設立20周年を迎えることになります。これもひとえに会員皆様ならびにその他関係の方々のご理解とご支援の賜物と深く感謝申し上げます。

さて、昨年5月には奈良県企業文化の調査紹介の事業として、奈良の風土に育まれ成長するユニークな企業を対象に長年にわたり記録・調査し、また経営トップの取材を通じて発刊してまいりました冊子をまとめ書籍化し、『奈良企業人列伝 奈良に息づく風土産業』として出版し、奈良県の産業に係わる貴重な資料として全国に発信することができました。

今年も、万葉蹴鞠の復元・保存事業においては、「春日大社奉納蹴鞠」の斎行、書の文化伝承事業では、「第11回大仏書道大会」を東大寺大仏殿西回廊に於いて開催する予定です。

その他、奈良の歴史文化資源の探訪、吉野川源流の森を守る活動支援などの諸事業についても継続、推進してまいります。

今夏には、2020年東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。これらを契機として更に古都奈良を訪れる国内外の観光客の増加が期待されます。

今後も、当フォーラムの活動に集う人々の知恵や力を結集して、日本の歴史・文化の発祥の地である奈良の地において意義ある事業を展開、推進してまいります。

会員皆様の変わらぬご理解とご支援並びに各事業への積極的なご参加をお願い申し上げます。



理事長 植野康夫

（2020年1月吉日）

2019年7月から12月に実施した事業

1. 「奈良の歴史文化資源」の探訪

(1) 寺内町今井を中心に、江戸期の建物探訪

実施日 令和元年9月26日（木）

参加者 25名

まだ暑さが残る長月の終わりに一行は集合地の八木駅から徒歩で約10分の「八木札の辻交流会館」に着いた。「札の辻」とは横大路（奈良盆地を真っ直ぐに東西に走る古道）と下ツ道（奈良盆地中央部を南北に走る直線の古道）が交わる所で、この辺りは近世になると宿場町として大いに賑わい、高札^{こうさつ}が立つ場所であったことが、呼称の由来となっている。



八木札の辻交流会館

交流会館はかつての旅籠（東の平田家）で、木造二階建。一階は接客と主人の居室、二階が宿泊施設として使われていた。内部の随所に施された数々の工夫については、当時の当主がいかに文化人であったかを思わせるものであるなど、関係者から解説を受けた。そして、講師からは「横大路」についてや、古代4回にわたってラクダが大陸から船に乘せられて我が国に連れてこられたことが『日本書紀』に記され、これらのラクダはどのようにして飛鳥の宮殿に運ばれたかなど、推測を交えての話を伺った。

次に一部下ツ道を通り、南西へほぼ2キロのところにある「今井町」へと向かう。全国最大規模の重要伝統的建造物保存地区で、現在500軒の町屋が連なるがその佇まいは現在にも生きつづける江戸期民家の博物館といったところだろうか。今井町は戦国時代に、称念寺を中心に一向宗徒が集まる寺内町として自治区をつくりあげ、自衛上武力を養い、周りに濠をめぐら

したのもこの時代。東西600m、南北310m江戸初期の概略であるが、町内の道路は屈折させてあり、見通しが悪く軍事目的でつくられたことがよくわかる。しかしその後、大阪や堺などとも交流が盛んになり商業都市として変貌をとげ、江戸時代には南大和で最大の在郷町になって、「大和の金は今井に七分」といわれるほどに繁栄。町は富裕な商人の財産等を外部から守るというものに変わっていった。



重厚な八棟造りの今西家

町内大半の民家が江戸時代以来の伝統様式を保つが、なかでもひととき目を引くのが、かつての西口門跡近くに建つ今西家。代々総年寄りの筆頭を務めた家筋とあって、その外観は城の^{やつむね}天守閣を思わせる八棟造り。

この日、本館同様の造りの別館で「重陽の節句膳」を頂いた。町内に伝わる「バラ寿司」に加え、当主奥様オリジナルの手料理が一品ずつ、漆塗りの器に盛られ、足付きの漆膳が一人ひとりの前に据えられた。「質素単飯」が家訓とうかがったが、今となっては贅沢な空間でのお膳食にみんなの会話も弾んでいた。

食後は、重文指定の本館へ移動。高い天井に広い土間。ときおり、通り抜ける風が暑さを忘れさせてくれた。奥様より今西家の歴史や、家の構造に至るまで、そしてこの土間で「お白洲」があったこと等々、長い歴史を守ってきた住人なればこそその貴重な話に、みんなは熱心に耳を傾けた。内部見学のあと称念寺に立ち寄り、ボランティアガイドの説明を受け、その後は三々五々に最寄りの駅へと向かった。(N.N 記)



今西家の説明を聴く

(2) 宇陀松山 城と町

実施日 令和元年11月20日(水)

参加者 24名

深まりゆく秋の一日を宇陀松山に訪ねた。バスの車窓からみる銀杏やモミジの色付きが美しい。近鉄八木駅から約1時間で最初の訪問地である「かぎろひの丘」に到着。この地は阿騎野と呼ばれ、飛鳥時代には宮廷の薬獵の場所であったことが『日本書紀』に見える。



かぎろひの丘

**東の 野にかぎろひの 立つ見えて かへり
みすれば 月傾きぬ**

かぎろひの丘に歌碑も建ち、あまりにも有名な歌である。

持統6(692)年、冬、軽皇子ら一行がここで旅獵した。のちに即位して文武天皇となるが、この狩りの時はまだ10歳を過ぎたばかりの少年であった。

この旅獵に宮廷歌人として従った柿本人麻呂が詠んだ歌であるが、一行が阿騎野に赴く様子を歌った長歌に対し、これは反歌四種のうちの一首。

広大な阿騎野の明け方の荘厳さが鮮やかに歌われているが、東に伊那佐山、西に音羽山、経塚山、南には高見山、そして吉野の遠山、竜門岳と、公園化されているこの丘からの眺めは素晴らしく、歌の情景を彷彿とさせる。

残りの反歌三首も紹介された。

講師の話は続いた。実はこの狩猟は単なる遊びではない。そこに忘れがたい記憶が重ねられている。かつて軽皇子の父草壁皇子も、この阿騎野で狩りをした。

草壁皇子は母^{うの}鷗野皇后が、ライバルの天津皇子を倒してまで皇位につけたいと願った最愛の皇子だが、皇太子のまま28才の若さで病死。このとき軽皇子はわずか7才。やがては皇位を継ぐべき幼い皇子の御狩り。わざわざ厳冬に、しかも野宿するなど、狩猟は父草壁皇子への追憶と鎮魂の行事であったのかもしれない。と話をしめくくった。

このあと西に10分ほどの所に鎮座する古社「阿紀神社」へ。主祭神に天照大神をお祀りする。靈気に満ちた境内には能舞台があり、6月には、側を流れる川に蛍が飛び交うなか行われる「蛍能」は格別とのこと。

この後は、町中の久保本家酒造で昼食をいただき、冷えた体もほっこり。

食後は、ボランティアガイドの案内で、宇陀松山城跡へと向かう。城は標高473mの山塊一帯に築かれたといい、360度の視界が開ける。

城は在地の秋山氏の本城として築かれたこと、そして元和元年（1615）に幕命により

壊され、範囲は城郭全域に及び、その役を担ったのが小堀遠州と中坊秀政。虎口郭や本丸天守部などの主郭部や、周囲を囲む櫓や石垣のことなど、細部にわたり、解りやすく説明を受けた。

この後、「薬の館」（旧細川家住宅）まで街並みを楽しみながら歩いた。ここでは館についてや薬草の説明を受け、薬関係の資料展示や細川家ゆかりの展示を見学し、道の駅へと急いだ。みんなは買い求めた地場産の品々を手し、バスで帰途についた。（N.N 記）



阿紀神社の能舞台をバックに講師の説明を聴く



宇陀松山城跡でボランティアガイドの説明を聴く



薬の館

2. 万葉蹴鞠の保存

◎春日大社奉納蹴鞠の実施

奉納蹴鞠の宴 in 飛火野 ―新たな奈良県観光資源に―

10月20日（日）、春日大社奉納蹴鞠行事として、万葉蹴鞠の奉納を同大社「林檎の庭」で行いました。その後、飛火野において競技披露及び一般参加の蹴鞠体験などを実施しました。

平成27年、28年の春日大社第60次式年造替奉祝行事として2年間にわたり春・秋奉納し、29年から春日大社奉納蹴鞠行事として年1回実施しており、今回で7回目の奉納蹴鞠となりました。

今回も、奈良市観光協会のご協力を得て、女官役として「奈良シティーコンシェルジュ」の塩坂真季さん、新子千尋さんの2名に参列いただきました。

出演者一同は「林檎の庭」にて玉串奉奠など正式参拝した後、天理大学雅楽部の皆さんによる雅楽の調べが響く中、古代衣装姿のフリースタイルフットボーラーの飯島正人さんが蹴鞠を奉納しました。その華麗な足技に、一般参拝者からも拍手、歓声が湧き上がりました。

飛火野へ移動し、主催者挨拶や来賓祝辞の後、再度、飯島正人さんが華麗な蹴鞠の足技の妙技を披露、続いてYF奈良テソロとボルベニル飛鳥の中学生チームによる蹴鞠競技と天平衣装姿の奈良万葉蹴鞠チームによる蹴鞠競技が披露されました。競技終了後、一般観覧者にも蹴鞠体験に参加いただき、古都奈良ならではのひと時を楽しんでいただきました。

以下、当日の様子を写真で紹介いたします。（役職などは開催当時のもの）



古代衣装で林檎の庭へ向かう出演者一同



玉串奉奠など正式参拝の様子



飯島正人さんによる華麗な足技披露



飛火野会場へ移動



天理大学雅楽部の皆さんを先頭に
飛火野会場に入場



折原英人・奈良県観光局長が来賓
を代表して挨拶



主催者を代表して猪熊兼勝・当フォー
ラム理事（蹴鞠製作委員会委員）が
挨拶



貴人役に扮した西谷忠雄・奈良市副市長（中央）



中学生チームの競技（YF 奈良テソロとボルベニル飛鳥）



奈良万葉蹴鞠チームが競技披露



蹴鞠体験を楽しむ観光客の様子



一口メモ

蹴鞠発祥

—日本サッカーのルーツは蹴鞠、その源流は奈良にあり—

「続日本紀」によれば、淳仁天皇の西暦 758 年（天平宝字 2 年）11 月 26 日に「一芸に秀でた人を選んで表彰した」という記録があり、打球、弓などの達人 50 人が表彰されています。この「打球」が蹴鞠ではないかとされています。

遡ること 100 余年前、「日本書紀」によれば、中大兄皇子が法興寺で「鞠を打った」際に皇子が落とした靴を中臣鎌足が拾ったことがきっかけで 2 人は親しくなったとされており、靴が脱げたことからこれが蹴鞠ではないかと推定されています。

大化は国の起源であり、日本の夜明けとされますが、蹴鞠を源流とする日本サッカーの夜明けもここ奈良の地からではなかったかと想像できます。

（当フォーラム万葉蹴鞠パンフレットより一部抜粋）

3. 書の文化の伝承

◎第10回大仏書道大会「書くことは楽しい in 奈良」を開催

実施日 令和元年11月9日（土）～10日（日）

会 場 東大寺大仏殿西回廊

11月9日（土）から10日（日）の2日間、東大寺大仏殿西回廊に於いて、「第10回大仏書道大会」の書道展を開催しました。10日（日）には表彰式・席書会・大仏さまへの作品奉納を行いました。

当書道展は、書の可能性を感じさせるような作品、単なる教科書的な技術だけではなく、自由な感性、創造性や味わい深さなども加味し光をあてる稀有な大会として、全国から毎年多数の応募をいただいています。平城遷都1300年を記念して始まり、今年で第10回目を迎えました。

今回は10回目の節目となる大会にふさわしく、全国72の高校・大学から2001点の応募があり、応募校、応募作品ともに過去最多となりました。

同書道展にさきがけ10月16日、朝日新聞社奈良総局において森本公誠・東大寺長老（当フォーラム理事・特別顧問）を審査委員長に迎え、奈良県教育委員会の書道担当職員、高校や大学の書道教員の方々に審査に携わっていただき、7点の特別賞と93点の入賞作品を選定しました。若者らしい個性を発揮した作品が数多く見られました。

また、奨励賞に榛生昇陽高等学校（奈良県）、山形西高等学校（山形県）、久喜高等学校（埼玉県）の3校が選ばれました。

今年も受賞作品100点を大仏殿西回廊に展示しました。折から正倉院展の開催期間と重な

り、地元奈良のみならず全国各地・海外からの参拝客、観光客の方にも観覧していただき、1200名余りの来場を得ました。2日目は席書会も開催し、森本長老の講話の後、高校生・大学生約20名が華嚴唯心偈（百字心經）の写経と自由な作品創作を行いました。その後、森本長老のご案内で、大仏さまの台座へ上がって作品を奉納しました。



審査会の様子（朝日新聞社奈良総局）



展覧会の様子



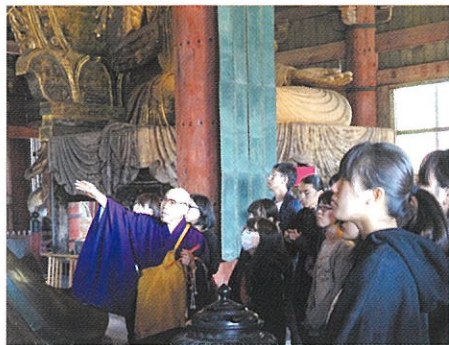
森本長老の講話に耳を傾ける



表彰状が授与される



席書会の様子



登壇して大仏様に作品の奉納

特別賞（7点）

奈良県知事賞「於ほらかに」

西村 康さん（東大寺学園高校）

会津八一の歌「おほらかに もろてのゆびを ひらかせて おほきほとけは あまたらしたり」の全文を書かず、ひらいたゆびと書き出しの五文字によるまさに大らかな構成です。明治の大修理中にその足場の上から八一が参拝したという、その目の高さで指を描きましたか？八一の歌（仏教の華嚴の宇宙観や祈り）に重ねた作者の願いが、ズシンと伝わってきます。



奈良県教育長賞「決意」

西本有希さん（奈良女子大学）

文字をくっつけて書くのは意外に難しいものです。恩師の大切な言葉を下絵の丸と連動させた「かたまり」で書き、余白を作りました。大小の丸（シャボン玉）により、その余白に遠近感が生まれています。丸の筆の動きは大きく、毛筆を好んで学んだ者の線質です。印の位置もよい。



奈良市長賞「命」

大嶋 碧さん（埼玉県立越ヶ谷高校）

隸書体で命と書き、そのまま作者は筆を体ごと大きく回して？の点まで書き進めました。毛筆でしか出せない渴筆を伴う？の生きた線により、見たことのない大胆な構図となりました。不安と疑問だらけの人生を文字と記号で表現するとはおもしろい発想と試みです。



奈良市教育長賞 「未完」

杉本有香さん（新潟県立新津南高校）

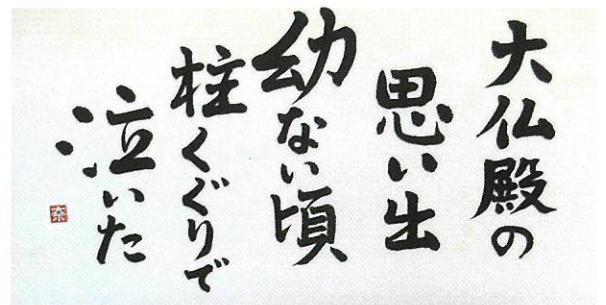
「未完」は「未完の大器」を思わせる若者らしい語句で、いいですね。この語句の表現手段として文字を白抜きにし、はけで墨をぬらず筆勢を残したことで、思いが伝わります。「何をどう表現するか」をしっかりと意識して作品作りをしている点が素晴らしい。



東大寺賞 「祖父と行った大仏殿での出来事 ---」

柴田ななはさん（大阪国際滝井高校）

大仏殿には大仏さんの鼻と同じ大きさの穴が空いた不思議な柱があり、この「穴くぐり」に連日、行列ができています。幼い頃の作者の思い出が審査委員長森本長老の目に止まりました。行頭の文字を横に並べず書き出しを工夫して五行にまとめ、素直な筆使いです。「泣」の四つの点は、空間を生み、絶妙です。



朝日新聞社賞 「飛鳥大仏」

嶋田鈴菜さん（育英西高校）

生まれ育った所と人々との思い出を簡潔な文で綴りました。春は…と『枕草子』のような構成で展開、小学生の絵日記を思わせる絵もまた効果的でほのぼのと共感できる情景が目浮かびます。朝日新聞社の小滝さんが、「みっちゃん落ちて泣いた」がいいね、と…。

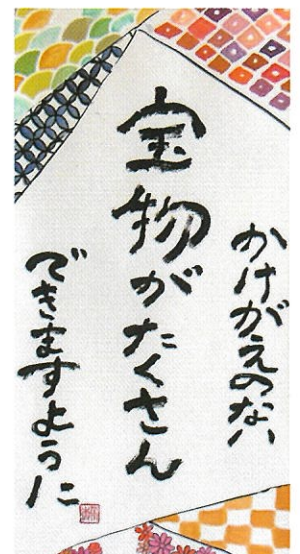
筆使いや文字の配列は自然で、よく収まっています。



奈良 21 世紀フォーラム理事長賞 「宝物」

廣岡茉奈さん（大阪府立今宮高校）

日本の伝統的な文様をあしらったことで書かれている言葉（かけがえのない宝物）に深い意味と広がりを感じさせていると思います。筆をすべらせないで、しっかりと紙に食いこませる筆運びです。作者の願いが一字一字に込められているようです。



2020年1月発行

編集 中村優造

発行 NPO 法人 奈良二十一世紀フォーラム

〒630-8244 奈良市三条町 511-3 奈良交通第2ビル